

会員の ひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

陶芸家 柴山勝の思い出

函館市医師会
江口眼科病院

えぐちしゅういちろう
江口秀一郎

東京から函館に戻り今年で丁度25年になります。函館に戻って直ぐ、散歩中に、あるお店の展示スペースに置かれた5卓の絵皿に目が吸い寄せられました。絵皿には津軽海峡でのイカ漁の光景が、日の入りから日の出までの時間経過に分かれて5枚の皿に描かれており、その緻密な描写とどこかユーモアを感じさせる絵柄がとても魅力的に感じられました。恐る恐るギャラリーに入って作品を再度眺めてみると、灰色の胎土にしっとりとした落ち着いた色彩で色絵が描かれており、やはり、どこか骨董を思わせるデザインと、意匠の独自性が際立っていました。お店の方に作家の名前を伺ってみると柴山勝という方で、北海道を代表する陶芸家であること、函館郊外の戸井町にお住まいで年に数回、函館、札幌、東京の決まったギャラリーで個展をされることを教えてくださいました。

その後、函館のギャラリーで開催された個展に伺ってみると、良いなと思った作品は開催初日に売れてしまう人気ぶりでしたが、多数の作品を見る事が出来ました。日曜日に訪れたそのギャラリーには丁度、柴山さんもいらしており、ご自分の作品の説明を熱心にして下さいます。皿に描かれているのがヒラツメガニとイシガニで、そのオスとメスの違いも絵に描き込んであること、早朝出かけてスケッチした秋草の葉の端に朝露がついており草陰から出てきたコオロギが片隅に描かれていることを熱心に話し続けられます。当直の時間も迫り、そろそろ病院に帰らねばならぬという私の内心の焦りには全く気付くことなく、ご自分の描いた作品の世界を心から嬉しそうに話す柴山さんの姿がどこか浮世離れして、今時こんな方が本当にいらっしゃるんだと、感嘆とも呆れたとも言えるような気分になると共に、

この人絶対血液型B型だろうな—という考えがぼんやりと頭に浮かんできたのを覚えております。

その後、彼の個展がある度に丸井今井札幌本店や青玄洞、東京渋谷のしぶや黒田陶苑等を訪れるようになり、時には戸井の柴山さんのお宅を訪れ、今度はどんな題材に夢中になっているのかな？と偵察に伺うようになりました。私の柴山コレクションも少しずつ増えて行き、戸井町の風景や海の魚たち、溪流の魚たち（写真）、野に咲く花々等どれも魅力的な作品でした。柴山さんはスケッチブックを片手に写生を重ね、彼が見つめた道南の風景を、植物を、動物を、生き生きと、時にユーモラスに描いていきます。柴山さんの眼差しはあくまで温かく、かつ優しく、その絵は難解に走ることなくどこまでも平明で、柴山さんの作品を眺めていると、柴山さんの見つめた景色や野に遊ぶ動物世界に共に足を踏み入れて、一緒に遊んでいるような柴山さんが作品に籠めた幸せで温かい時間を感じることができます。こんな所が北海道だけでなく日本中で彼の作品が愛され続けた理由の一つなのかもしれません。そんな柴山さんも奥様を数年前に亡くされてから体調がすぐれず、創作に充てる時間も限られてきました。優れた作家ではありますが高尚な芸術品より毎日使われる「うつわ作家」を目指された柴山さんの作品が散逸し、まとまった作品群を観る機会がなくなってしまうことを惜しみ、また、柴山さんを少しでも元気づけることができればと思い、函館、十字街の工藝舎というギャラリーのご夫妻と協力して2階に「柴山勝記念室」を開設する準備を始めました。柴山さんは、工藝舎の皆様と共に企画した本展示室の開設準備がほぼ整い、開設の喜びを分かち合おうとしていた2021年6月8日、誠に残念ながら77歳でご逝去され、その開設を共に喜べないことは誠に残念でなりません。しかし、日本中の多くの方に愛された柴山勝さんの作品を通して、柴山さんが見つめた命とその景色を、そしてその作品に籠められた柴山さんの幸せな時間を、この函館の地で皆様と分かち合うことができればと願っております。函館にいらっしやる機会があればどうぞ十字街の、はこだて工藝舎2階、柴山勝記念室にもお立ち寄りいただければ幸いです。

